

「学びたい」につながる授業づくり～佐々木先生～

黒板の前で佐々木先生が教えながら、もう一人の「算数が苦手な佐々木君」が子どもの席に座って学んでいるのではないかと思います。「子ども目線」で考えるのがうまく、「佐々木先生」の目で子どもたちを見つめられるようになりたい」という気持ちでいっぱいになりました。

私は、教材研究をすればするほど、「あれも教えたい」「こんなことも気付かせたい」と「教える」想いが強くなっていきます。佐々木先生は、教材研究を深めながらも子ども目線。それも、算数が得意な子、苦手な子、表現が得意な子、苦手な子など、目の前の子どもたちの一人ずつの目で考えておられます。

だから、「つまずきやすいところをどうするか」「どうやったら、子どもたちは気づくことができるか」「どうやったら、学びたいにつながるか」と、様々なしなけを考え続けられているのだと思います。「できない」「わからない」を子どものせいにするのは、簡単です。でもそんな子をどうするか、プロとして考え続けたいですね。



国語授業づくりについて ～有崎校長先生～



教材研究という言葉を使い、簡単に使っている自分を大きく反省しました。教える材として捉える前に、まずは一人の読者としてどう読むか、まさに「素材研究」を行う。その後に、子どもたちに「教える材」とするために、どうするか。そして、その後にどういう「指導方法」が目の前の子どもたちに合うかを考えていくことの大切さを感じました。もしかしたら、「どう発問するか」「どう板書するか」など所謂 HOW TO をすぐに考えてしまっているかもしれません。

「おおきなかぶ」を教えるのではなく、「おおきなかぶ」という教材を通して、何を教えるか。ここをしっかりと考え、子どもたちがたどり着けるように、指導方法を考えていく。そこには、教えるプロとして意図があることの大切さを感じました。

自分の中の「知的な好奇心」が喚起され、アツという間の時間。こんな知的な楽しさを味わえる授業をめざしていきたいと思います。こんなあこがれの姿を、目の前で学べることに、幸せなことですね。

学びがつながり、広がる

研修終了後、お二人のもとに次々と質問する先生方の姿がありました。こういうのが、いいですね。それだけ、お二人の話が先生方の「知りたい」「学びたい」「あんな授業をしたい」と心を動かされた証だと思います。

府中南小学校は、学ぶ意欲溢れる先生方がいっぱいいます。

